

はぐくむ10年

大人びてきた元気印

震災の約1カ月後に生まれた宮城県南三陸町の工藤大和君(9)は、もうすぐ小学4年生になる。津波で全壊した自宅があった川べりを見渡せる高台で、仲良しの妹結愛さん(8)と跳びはねる姿が大人びてきた。

家族8人で7年半、仮設住宅で暮らした。幼稚園に通う2人の姿を写真に収めたのが2016年春。新築した家に移ったのは19年春。大和君はサッカーのスポーツ少年団に入り「メッシみたいなプロ選手になりたい」と夢を語る。結愛さんはダンスが得意だ。

「2人は生まれ変わった街しか知らない。行方不明の祖父のことも震災も必ず伝える」と母の千寿さん(43)。子どもたちの笑顔が震災前と今、そして未来をつなぐ。

東日本大震災から10年の歳月を積み重ねた。東京電力福島第1原発事故にも見舞われた被災地を、多くの人たちが支えてくれた。つなぐに感謝し、あの日を伝え続ける思いを新たにしたい。

東日本大震災 10年



避難所のアイドル

気仙沼市の自宅震災津波に襲われ、家族8人が避難し、障子体育館。身を寄せた約7000人の中で、当時1

歳3カ月の村上愛さん(11)は数少ないアイドル。ミルクおむつをこきこい生活。「夜泣きがひどく、迷惑を掛けないように涙かきつけた」と母の香澄さん(32)。それも周りは笑顔の輪が広がった。避難所のアイドルとして被災者の心を癒した。

心愛さんは春、小学校に入学。息を吐いた家と家業のケアを兼ねて、学校で手紙の面談を促され、代表は人の保育士になった。この言葉になる。



つむぐ10年

孫が増え「幸せ」

原発事故の直後、福島県葛尾村の木工松本凡彦さん(68)は幼い孫家族11人と福島市のあづま総合体育館に身を寄せた。約3年の仮設住宅暮らしを経て、同県三春

町の中古一戸建てで妻、次女と暮らす。一緒に避難した長男、長女はそれぞれ南相馬市、滝沢市へ。当時4人だった孫が今は6人。「村に帰れないのはつらいが、10年で孫が増えたのは幸せなことだ」。避難生活中は宮城、福島両県で仮設住宅の建設にも携わった。



不届のジャズ喫茶



2・3面

助け合う、支え合う

4・5面

向き合う、伝え合う

7面

多様な支援 国内外から

8・9面

届け、私たちの「ありがとう」

11・12面

あなたの3.11エピソード

14面

サンドウィッチマンと10年



「平凡、普通が一番」

「太陽のように温かく、周りを明るく照らせる人に」。両親の願いが名前に込められた堀内陽仁君は、10歳になる。寒さに震えた10年前の3月12日未明、石巻市釜釜の保健室で産声を上げた。「大勢の支えがあって今がある」と母のひと美さん(42)は目を潤ませる。「日本の歴史の本が好き」と照れくさそうに話す陽仁君。将来の夢は探し中という。「平凡でいい。普通が一番」。当時、誰もが思った言葉を口にしてはにかなかった。

子どもの笑顔が光

障害者の自立支援に取り組む気仙沼市のNPO法人「ネットワークオレンジ」代表理事の小野寺美厚さん(51)は、震災から12日後に障害児デイサービスなどの活

動を自宅で再開した。失った拠点施設は10年の間に4カ所に増やし、利用者はほぼ倍の約50人に。「あの時も、子どもの笑顔は光だった。誰もが安心して暮らせる社会づくりが復興の証しになる」と信じ、歩み続ける。



漁港の復興に感慨

津波で1階が押し流され、鉄骨柱が2階をくわろうじて支えていた宮城県亶理町の興漁協亶理支所(現仙南支所)の前で、運営委員長を当時務めた菊地伸悦さん(75)は「一日も早く漁を再開させると力を込めた。流された漁船の多くは修復すれば使えそうだった。3カ月後、同町の荒浜漁港で水揚げが再開。支所も2014年に仮設から復興事業で建設されたビルに移った。「10年でここまで復興するとは思わなかった」と感慨深げに話す。

